

氏 名	王 標
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 4428 号
学位授与年月日	平成 16 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当者
学 位 論 文 名	袁枚とその交遊ネットワークの研究
論文審査委員	主 査 教 授 山 口 久 和 副主査 教 授 齋 藤 茂 副主査 教 授 三 浦 國 雄

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、思想史、文学史、社会学などの学際的な視点を取り入れながら、「性霊」説をひっさげて清代中期の文壇に風雲児として活躍した袁枚が、地域社会の中で様々な戦略を取りながら、誤解と葛藤、諸価値の対立の狭間の中で、「権力の言説」(フーコー)をめぐって演じた特異な文化的パフォーマンスの意義と象徴を分析し、清代中期知識人社会の具体的な様態を考究しようとするものである。

第一章「都市型知識人社会の形態」は、清代中期における都市型知識人社会の形態を解明する。その手がかりとして、最も都市化の進んだ清代江南地域の蘇州・揚州・南京という三つの中心都市を舞台にして、当時の知識人が「文学場」と「学術場」という二つの主要な知的空間で演じた継承と革新、模倣と創造、等の文化的パフォーマンスを詳細に分析する。そして、清代中期の「義理」・「考拠」・「詞章」という三つの「知」の類型と都市との関わりを明らかにする。また、知識の生産・流通を担う文化装置として、三つの都市に置かれた書院・幕府などの学習空間と職域空間、遊里・園林などの悦楽空間を統合的に把握し、特に書院・幕府などの職域空間と都市型知識人の職業化との関係を明らかにする。最後に、知識人の都市間の社会的移動と地理的移動の有り様や都市内部の文化装置の性格を解明するために、都市型知識人の社会構造のモデルを提出する。三つの都市はそれぞれが政治・経済・文化に異なる重点を置いていたことによって、都市の生態構造、文化的装置や文化的特徴などに微妙な差異が生まれた。知識人はそれぞれ都市の異なる性格に応じて、みずからの移動策略(スキナー)によって、多種多様なチャンスを求めようとして中心都市に蟄集し、経済資本・文化資本・社会関係資本を有効的に利用して、流動的危機的な競争社会の中で知識人「共同体」を形成して行ったことを明らかにしている。

第二章「随園を訪ねてきた人々」は、『袁枚全集』に言及される人物・出来事や詩題中の人名の出現回数によって作成したデータベースを用い、南京における袁枚の交遊ネットワークを明らかにし、彼の私邸園林である「随園」を訪ねた地方官、考証学者、寄寓者、土着の士人(知識人)たちから成る交遊者との交遊の実際状況に分析を加え、人的ネットワークの社会的性格を詳細に論じる。さらに進んで袁枚との文学的交遊、思想交換の場を通して、南京知識人たちが共有していた意識や感情、言説を分析し、清代中期の南京知識人社会特有の生態を論じる。この交遊ネットワークはある種の文化的思想的危機状況の中で、そして伝統社会の中に存在するあらゆる正統的なものとの軋轢の中で、様々な利害関係を持った人々によって意識的に形成されて行った知識人集団であったことを結論づけている。

第三章「袁枚と蘇州」は、蘇州における袁枚の交遊ネットワークの中には南京と異なる社会的性格があること、袁枚は蘇州で最も多くの女弟子集団を有していたこと、蘇州の文化的正統性と文化的中心地としての地位という三つの側面から、袁枚が蘇州で行った文化的活動を考察する。袁枚が「個性・自由」の旗印の下、蘇州で行った様々な文化的パフォーマンスは、「性霊派」の文壇での影響力を拡大させることになり、その結果、道

学的習気の強かった蘇州の詩壇で反道学的な袁枚は成功を収めることができたこと、また、知識人の「偽善」を批判することによって、朱子学を標榜する「道学先生」との「言説権力」をめぐる闘争に勝利したことを明らかにしている。

第四章「湖楼詩会」は、袁枚の杭州での活動記録を取りあげ、交遊ネットワーク内の杭州を原籍・居留地とするメンバーを分類し、交遊者それぞれと袁枚との交遊関係を具体的に調査する。ついで、晩年の袁枚が杭州で女弟子を集めて催した湖楼詩会とそれを記念するために描いた「湖楼請業図」およびその参会者リストの真偽問題を実証的に検討する。さらに、文化的な戦略という角度から、湖楼詩会を催した主な動機を解説し、杭州籍女弟子集団の袁枚の交遊ネットワークにおける特殊性を明らかにする。袁枚は、みずからの息のかかった杭州の女流詩派を大々的に拡大し、女弟子の身内の官僚とくに現役官僚の男性家族成員を媒介にして、彼自身の社会威信がいまだ薄弱であった杭州に新たな権力を求め、徐々に杭州におけるみずからの社会基盤を作り出して行ったことを明らかにしている。

第五章「メディアとしての〈随園雅集図〉」は、「随園雅集図」が袁枚の交遊ネットワークの中で転々と回覧され、画賛詩が絶えず書き加えられて行ったことに伴い、この図に登場した人物とそれぞれの道具立ての中に隠された記号化の〈意味〉〈メッセージ〉が、受容者の鑑賞を通して繰り返して喚起されたこと、また、袁枚は交遊者に画賛詩を求めることによって、交遊集団の統合、一体化を強化したことを明らかにした。さらに「随園雅集図」は袁枚の交遊ネットワークの象徴的な集会的表象として機能しており、知識人もまたみずからを時代の文人的理想に適合した権力の一個の記号に化そうと志向する特有の言説がこの図にはあふれていること論じる。

第六章「〈汎文〉と〈汎情〉の言説」は、「汎文」と「汎情」という二つの概念を用いて明清時代知識人社会の文学重視と主情主義の現象を説明する。ついで、清代中期における知識人社会がますます狭隘化する脱政治的な「立言」(文学)に向かったこと、そのため、知識人たちは応酬活動としての詩文の唱和に熱中し、いたずらに「情」を空想し「才」を銜うだけの文字の世界の中で内省的個人的感性を湮没していったことを論じる。袁枚が「汎文」と「汎情」の時代の象徴として、一連の文化的パフォーマンスを通して自分自身の社会的威信を打ち立て、正統的なものとの闘争の中で文壇での新たな権威と影響力を獲得したことを明らかにする。最後に、清代中期における「義理」「考拠」「詞章」という知的言説の分裂状態の中で、「著作」・「考拠」をめぐる袁枚と孫星衍との論争、その論争に対する焦循と章学誠の意見を考察する。そして「汎文」的な思潮の中で、袁枚ら知識人は知的世界の中で最も価値あるものは何か、何が正統か - 文学か、或いはその他か - をめぐって各自の言説を闘わせ、自らの言説によって知的世界を支配しようとしたことを明らかにする。

附章「十八世紀中国知識人の華夷観 - 『四庫提要』を中心に - 」は、袁枚の詩友ネットワーク内で満州族の後援者や交遊者が高い比率を占めているという事実の思想的背景を究明している。また、清朝統治下における満・漢両民族の互酬的な関係を明らかにしている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、思想史、文学史、社会学などの学際的な視点と方法論を積極的に取り入れながら、18世紀後半の清朝乾嘉期の大文化人とも呼ぶべき袁枚と彼を取り巻く知識人集団が、南京・蘇州・揚州・杭州といった地域社会の中で演じた特異な文化的パフォーマンスの意義と象徴作用を分析し、清代中期知識人社会の具体的な様態を解明しようとしている。従来の袁枚研究が、詩人袁枚、あるいは思想家袁枚に焦点を当てる個別的考察の域を出なかったのに対し、本論文は、江南諸都市が帯びている政治的、地理的、歴史的環境の中で袁枚を中心とする知識人社会の様態を解き明かそうとする視点を提示しており、その成果を十分挙げていると判断できる。

本論文の構成は全六章と附章から成っている。以下、章を追って説明する。

第一章「都市型知識人社会の形態」は、都市化の最も進んだ清代江南地域の蘇州・揚州・南京における都市

型知識人社会の形態を解明している。当時の知識人が「文学場」と「学術場」という二つの主要な知的空間で演じた文化的パフォーマンス（雅集）を詳細に分析する。知識の生産・流通を担う文化装置として、三つの都市に置かれた書院・幕府などの学習空間と職域空間、遊里・園林などの悦楽空間の持つ意味を総合的に分析し、職域空間と都市型知識人の職業化との関係を明らかにする。そして論者は、本論文の考察全体を貫く作業仮説として都市型知識人の社会構造のモデルを提出している。

第二章「随園を訪ねてきた人々」は、膨大な『袁枚全集』に出現する人名と社会的事件をデータベース化し、それに基づいて南京における袁枚の広範な交遊ネットワークの持つ社会的、文化的意義を明らかにしている。この交遊ネットワークは、伝統社会の中に存在するあらゆる正統的規範的なものに果敢に挑戦した袁枚が、「言説の権力」を奪取するために意識的に形成していった知識人集団であったと結論づけている。「エピキュリアンの才子」袁枚という従来の袁枚観に大幅な修正を突きつける論考である。

第三章「袁枚と蘇州」は、袁枚が「個性と自由」の旗印の下で蘇州にて行った様々な文化的パフォーマンスによって、これまでは道学的気風の牙城であった蘇州の詩壇に反道学的な「性霊説」を弘めることができたことを明らかにしている。

第四章「湖楼詩会」は、袁枚の杭州での活動を取りあげている。論者は、交遊ネットワーク内の杭州を原籍・居留地とするメンバーを分析し、袁枚との交遊関係を具体的に調査する。その結果、袁枚は杭州籍女弟子集団の親族の高級官僚を媒介にして、彼自身の社会威信がいまだ薄弱であった杭州に新たな文化的影響力を行使して行ったことを明らかにしている。第二、三、四章と論が展開するにつれ、江南諸都市において「言説の権力」の確立を目指す袁枚の周到な文化戦略が明らかにされていく。

第五章「メディアとしての<随園雅集図>」は、袁枚が主催した文人の集いを描いた「随園雅集図」中に記号化された<意味><メッセージ>を読み取ろうとする。「随園雅集図」は袁枚の交遊ネットワークの象徴的な集合的表象として機能しており、知識人が自分を時代の文人的理想に適合した権力の一個の記号に化そうと志向する特有の言説がこの図にはあふれていると論じている。

第六章「<汎文>と<汎情>の言説」は、清代中期における「義理」（哲学）「考拠」（文献学）「詞章」（文学）という知的言説の分裂混乱状況の中で、「汎文」と「汎情」すなわち文学重視と主情主義を前面に押し立てて言説世界における正統的地位の獲得を目指した袁枚とその論敵たちの論争をトレースすることによって、乾嘉期の言説の諸相を浮き彫りにしようとしている。ただ、乾嘉期の言説世界を俯瞰するには、袁枚、孫星衍、焦循、章学誠だけでは不足の感は否めない。

附章「十八世紀中国知識人の華夷観 『四庫提要』を中心に」は、袁枚の交遊ネットワーク内において満州族出身者が高い比率を占めているのは、満州貴族の政治的影響力を借りて文化的影響力を確立しようとした袁枚の文化戦略の一端であったことを論証している。

本論文は、膨大な袁枚全集の徹底した読み込み、乾嘉期文化人に関する広い知見、日本と中国だけでなくアメリカのシノロジーの成果の積極的吸収、これらが相俟って清朝文化史研究に一石を投じ得た力作となっている。とはいえ、論者が取り上げたのは時代精神の象徴的存在と言いながらも袁枚ただ一人である。論者が第一章で提示した都市と知識人の分析モデルは袁枚に適用できても、はたして他の文化人にも適用可能か。また論者は南京、蘇州、揚州といった江南の大都市を念頭に論を立てているが、華北の諸都市あるいは中小都市と知識人の関係はどうなるのか。いくつかの疑問が残る。しかしながら、都市型知識人という視点から、清朝文化史をトータルに解明しようとした姿勢は十分な評価に値する。

以上の所見により、本論文は大阪市立大学博士（文学）の学位を授与するに値するものと認められる。